

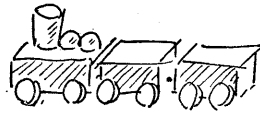
私の幼児教育論

—— 幼児の遊びと

幼稚園教育 ——

一、遊ぶ子ども

朝九時半頃幼稚園に行ってみると、子どもたちがいろいろな遊びをしている。室の中では、ままごと遊びや積木遊びをしている子もいれば、粘土遊びや折紙遊びなどに夢中になっている子もいる。中には一人で絵本を見ている子もいる。戸外を見ると、鬼ごっこ、砂遊び、ドッジボール、スクーター乗り、スベリ台、ブランコ遊びなど楽しそうである。他の子どもが遊んでいるのをじっ



と立って見ている子もいる。しかし、他の子どもの遊びの動きに合わせて顔をほころばせたり、体を動かしたりして、自分も遊びに加わっているような感じになっているのではないかと思われる子もいる。

ほとんどの子どもが一生懸命に何かをしている。その顔は生き生きとしている。一斉保育の中でときどきみられるような退屈さや緊張感などはほとんどみられない。

これは、いわゆる「自由遊び」の時間に見られる子どもの一般的な姿である。子どもはその遊びを他から強制されてやっているの

原 岡 一 馬

ではない。面白くて、やりたくてたまらないからやっているのがある。

戸外で虫を見つけると、他の友達にそれを知らせ、そのうち何人かが集まって虫を見る。すると、その中の一人が、「この虫の名前は何だろう」と問いかける。「それは図鑑に出ていたよ」と別の子どもが歩いて走って図鑑をとりに行く。

それらは与えられた課題でもなく、やらねばならない活動でもないのである。しかし、他者から指図されなくても、子どもたちはその一連の行動を自から喜んでやるのである。大人のだけれかがその行動を止めさせ、他の行動をやらせようとしても、「いやだ」とか「図鑑をみて調べるまで止ってよ」とかというに違いない。

このような一連の行動は子どもの好奇心をそそるような遊びであり、対象である。自分たちで発見したり興味をもった課題は強い動機づけを惹き起すものであり、子どもを生き生きとさせるものである。

子どもは、遊びが仕事であり、生活である。それを通して、知的にも感情的にも発達し、社会性や体力が養なわれる。全体的パースナリティの発達も遊びを通して育成されるのである。

二、遊べない子ども

子どもは遊びが好きで遊びを通して成長するものだといっても、子どもを長時間園庭に出しているだけでは、すべての子どもにとって有効な結果を生む遊びになるとは限らない。友だちとの遊びに入りきれず孤立したり、自分で楽しめる遊びを見出せなかったり、遊びに飽いて退屈したりして、生気を失う子どもがでてくるものである。

反対に、大人がいちいち手をかけて、そのオモチャはいけないこのオモチャで遊びなさいと指図しても、子どもは必ずしも喜んで遊ぶわけではない。大人には何でもない木片や紙片や布片が恰好の遊び道具となるものである。大人が設定した環境や枠組は、子どもが強制されたものだと思取ると、如何に面白そうな道具でも放棄してしまう。ところが、それが自然の中で自分が発見したものであれば喜んで遊ぶ。

このように、子どもは遊びが生活であるので、自然に遊ばせておけば喜んで遊びそれが有効な遊びになると考えるのは間違っているようである。また、大人が強力に枠組を作り、道具を与えて強制的に遊ばせようとしても、子どもにとって有意義な遊びとは

ならないのである。

子どもの遊びが子どもの成長と発達にとって望ましいものとなるようにしてやるためには、保育者はどうすればよいであろうか。このような問題を吟味するために必要なことは、幼児の発達にとって基礎となる原理と遊びの意味を検討してみることであろう。

三、子どもの発達を助ける指導の原理

自分の興味と能力を十分出しきって、楽しく思い通りの遊びができることは、その子どもの発達を促すことに連なると思われる。そこでは先ず、周囲からの脅しや制限ができるだけ少ないことが必要である。すなわち、子どもの自由を尊重することである。

次に、幼児は自から進んで遊び、その中で工夫し、発見し、それによって創造性や諸能力を発達させるものである。つまり、幼児の自発性を十分生かすことである。

自由な場で自発的に遊ぶ子どもは、自分の興味に従って行動するものである。逆に、興味のないことはいくら強制しても行な

うとしないのである。遊びの場や環境に子どもの興味を惹く刺激が用意されていると自然のうちに生き生きと遊べるものである。

そこで第三に考えねばならないことは、子どもの興味を十分理解しておき、それに合致させるよう環境を整備してやることであろう。

子どもの発達にとって遊びが重要であることの一つは、遊びが直接的で具体的であるということである。子どもの心性は具体的思考や自己中心性に代表されるといわれる。このことは、遊びの特性とよく対応するものである。子どもには観念的で抽象的な学習の方法は不適である。体験を通じた学習こそ本当に役立つものである。遊びはほとんどが体を通じたものである。どのように説明するかよりもどのように体験させるかが大切であろう。

したがって、第四の原理は体験させることだといってよからう。

ところで、具体性や体験は、それぞれの子どもによって違ふこともまた事実である。子どもはそれぞれ個性をもっている。言語表現は不得意でも豊かな感情をもっている子どもあり、運動遊びの得意な子どもいる。子どものもつ個性を尊重しつつ、望ましい子どもとして新たな個性の開発に向って指導していかねばならない。このように考えると、第五の原理として個性の尊重があげられる。

以上述べてきた五つの原理は、子どもの個人的特性に目を向けてきたものであるが、子どもは一人で生活するわけではない。幼稚園でも近隣でも、友だちと一緒に遊んでいるのである。家庭の中でも両親や兄弟姉妹との相互作用を通して生活しているものである。

これらの社会生活の中には一定のきまりや約束がある。基本的な生活習慣の確立というのは、子ども自体の個人的発達だけでなく、社会的生活に必要な社会規範に従った生活の基礎を養う必要があるのである。

日常の社会生活と同じように、遊びの中には約束ごとがある。ゲーム遊びには一定のルールがある。ルールが守られなければ遊びは面白くないばかりか、その遊びにも入れない。ゲーム遊びでなくても、数人で遊ぶ連合遊びなどでは、自分たちで約束ごとを決めないとうまくいかない。「あなたたちはそっちよ、わたしたちはこっち」というように領域設定の約束や、ブランコ乗りの順番決めや砂遊びでの協力など、いたるところに約束づくりやきまりの遵守が必要となってくる。集団遊びや協力遊びなどは社会性の発達にとって欠かせない体験学習の場である。つまり、第六の原理は社会性の育成ということになる。

四、子どもの発達にとっての遊びの意味

前節で、子どもの発達を促進する指導の原理を考えたが、それは、遊びを通してかなり効果的に獲得されるものと思われる。そこで、子どもの発達にとっての遊びの意味を考えてみることにする。

第一は、遊びは身体的発達を促すことである。遊び、特に身体運動遊びは、血行をよくし、敏捷性を養い、体力を身につかせ、その結果、身体機能の発達を促進させるものである。

第二に、遊びは知的な発達を促進させる。手に取ってみたり、さわってみたりして体験した子どもは、直接問題を見つけ出し、それに自発的に取り組むことによって、認知力、理解力、洞察力などが身についてくる。また、遊びを行なうにはお互いにコミュニケーションを必要とするため、言語発達にも役立つ。このように遊びは知的発達を促進させるものである。

第三に、遊びは社会性を身につけさせるものである。先にも述べたように、遊び、中でも集団遊びやゲーム遊びでは、共同や協力が必要であり、協調性や社会的ルールを守ることなどの社会的規範を身につけさせるものである。

第四に、遊びはパーソナリティ形成に役立つものである。遊びは本来、自発的なものであり創造的なものであるが、同時に自己統制、協調性が必要なものである。また、フラストレーションに對する耐性も必要となつてきて、したがつて、情緒的に安定した適応力の高い子どもを作ることに役立つ。

第五に、遊びは治療的役割をもつものである。遊びは自発的で自主的であるため、日常生活における心的緊張をときほぐし、カタルシスの役割をもつものである。自分の好きなことを思う存分行うことによつてスッキリした気分になるのはその効果である。

五、自由遊び

遊びがこのように子どもの発達にとつて重要なものであることはわかつたが、すべての遊びがそのような効果を挙げうるであらうか。また、自由に遊ばせることだけでそのような効果が得られるものであらうか。

筆者は、一般に幼稚園においてとられている「自由遊び」という形態が、果して子どもの自主性と自発性を惹き起こし、子どもの創造性を引き出すように構成されているかどうか疑問をもつ

ものの一人である。

「自由遊び」について教師たちがどのように考え、どのように対処しているであらうか。教師たちは、子どもを自由に遊ばせていることには違いないが、その中で一人一人の遊びを十分観察し、その子どもの自主性と創造性が発揮できるような場になるよう配慮しているであらうか、教師も一緒になつて遊んではいらなうが、多数者集団だけと接触し、少数者集団や孤立者には目がとどいていないことではないであらうか。「自由遊び」という名の下の遊びは多種多様である。その指導は、最も優れたベテランの教師が最大のエネルギーを使って、一人一人の子どもの自主性を育て、発達を促進させる場としては最も適切な場かもしれないが、だれもが簡単に効果を挙げうる場ではないと思われる。中には「何の手も加えないで自由に子どもを遊ばせさせよ」という考え方から、放任型の指導を行なっているところもあるように思われる。それもまた「自由遊び」という名称で語られるものである。「自由遊び」は、指導者の配慮の多様さにおいて一斉保育よりもずっと幅の広いものに違いない。おそらく、ある子どもにとつては最も適切で効果的な教育の場であることもあれば、他の子にとつては最も不適切で望ましくない場となることもあるう。

「自由遊び」の中で遊んでいる子どもを観察するとき、極めて生き生きとある遊びに熱中し、自分の能力を十分出しきっている子も見当るが、同時に、自分の興味ある遊びを見出すことも出来ず、ただぼんやりとつまらなそうに立っている子もいる。筆者の観察では、そのような子どもは放任されているか十分いきどよいた配慮がなされていないことが多い。

「自由遊び」は、すべての子が興味に従って自主的に自分の好きな遊びを自分が選んで楽しく行なえるように配慮された遊びのこととだけならばならない。そのためには、教師は、道具や設備や場所を十分配慮して提供してやるだけでなく、適切な働きかけや援助が必要なのである。子どもはちょっとした働きかけや援助によって、興味を起したり、自己を表出したりすることができるのである。

子どもを好きなように遊ばせてやるのが、いわゆる「自由遊び」ではないのである。「自由遊び」にも当然、一人一人の子どもを伸ばすためのねらいがなくてはならない。したがって「自由遊び」のねらいと指導は、個人指導と集団指導の両面が相互に関連し合ったものであるはずであり、一番難かしい指導であるといつてよからう。それだけに、十分の配慮が行なわれれば、一人一人の子どもにとって最も楽しく効果的な教育状況となるであろう。

六、自由選択遊び

昭和五十五年度の全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会における教育研究集会在、先ほど奈良女子大学の主催で行なわれた。その中の「自由選択活動の指導について」という分科会に筆者も参加してみた。

その中で問題となったものの中に一つに、自由選択活動とは何か、という本質の問題があった。提案や質問などを総合的に考えると、やはり教育現場では、自由選択活動についてはっきりした概念化ができ上っていないのではという懸念をもたざるを得なかった。「自由に選んでする活動」だとか「子どもの自由な活動」だとかいわれていたが、それが子どものも自主性や自発性、創造性や積極性などどのように関連するかがはつきりしていないのである。そのため、その内容が漠然としか理解されていない。したがって、自由選択活動において、教師が枠組や遊びの範囲を設定するのはよくないとか、決めるとすれば具体的にどの範囲のものか、さらに、遊びの用具や配列場所などをどのようにしたらよいか具体的に教えてくれというような質問がでてくる。「私のところの園ではこのような設定をしたら自発的自主的活動が多く出

た」という報告ならわかるが、「具体的にどのようにしたらよいか」という質問は、自由選択活動の意味がわかっていない証拠である。

教師が一人一人の子どもの発達状態、関心、欲求、態度などを見定め、この子にはこのような刺激が有効であり、このような働きかけが必要であると判断しなければならぬ。このような判断はその子と接触している教師の役割であり、また、その教師しか出来ないはずである。その判断ができるからこそ教師の専門性があり、ひいては教師の生き甲斐があるといえよう。

前節で述べたように、自然のままの環境では、すべての子どもに適切だとはいえないのである。子どもが自主的に自由に選択できるように、いろいろな状況を作り出し設定してやるのは教師の仕事である。そのような環境は、教師には意図された環境の構成であるが、子どもにとっては、自分で選択でき、興味をそそるような自主選択活動ができるような状況でなくてはならない。「自由遊び」が「自主選択活動」の意味をもつようになって初めて、子どもの発達に有意義な遊びとなるのである。

子どもが知的、感情的、社会的、身体的に発達し、一個人の人間に成長していくためには、「遊び」が大切である。しかし、すべての遊びが有効なものとは限らない。子どもの発達を促進させる

遊びは、自由選択の遊びに違いない。いわゆる「自由遊び」を自由選択遊びとして有効に設定し、援助してやるのが教師の保育活動の大きな役割であろう。子どもの遊びが一人一人の子どもにとって有効になるかならないか、適切な保育観と子どもを観察する眼と自主的に判断し、適切に対処できる自主的教師がいるか、いかにかかっているといえよう。

(佐賀大学)

